Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-10

グローバル雑誌の翻訳における再文脈化について ： 言語テクストと写真の英日独比較

藤濤, 文子

(Citation)
国際文化学研究 ： 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要,48:165*-182*

(Issue Date)
2017-07

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009891

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009891

グローバル雑誌の翻訳における再文脈化について
―言語テクストと写真の英日独比較―

藤　濤　文　子

1．はじめに

万葉集に「初春の初子の今日の玉帚　手にとるからにゆらぐ玉の緒」という大伴家持の歌がある。この歌をある老僧が引用したというエピソード[1]について、尼ヶ崎（1995, 33-34）は、この歌の「玉の緒」は、家持が詠った古歌では文字通り箒に付けられた玉の緒を指していたが、引用された場面では「命の比喩となって息もとまるばかりの感動を表している。（中略）新しいコンテクストに置かれることによって、新しい意味を得たのである。持家の素朴な季節の歌は痛切な恋の歌となった。歌の内容は一挙に深みと力を増す」と述べている。

古歌の引用というこの事象を翻訳に引き寄せて当てはめてみると、家持が詠んだ古歌は原文（起点テクスト=ST）であり、新しいコンテクストで老僧が発信して新たな意味を得た和歌が翻訳（目標テクスト=TT）と見ることができる。意味がもともと言葉の内にあったのではなく、「そのつどのコンテクストとの相互交渉から」（ibid., 35）生じるものだとの観方は、翻訳にも応用することができる。ここで興味を惹かれるのは、新しいテクストの内容が「深みと力を増す」と捉えられている点だ。翻訳において、STよりTTに深みと力が増す、と捉えられることはめったにないが、STの潜在的可能性が、別のコンテクストに置かれて別の人の手によって引き出されて顕現したものがTTである、と捉えることができるだろう。

一字一句違わない同一の和歌でさえ、異なるコンテクストで発信されれば意味が変わる[2]のであれば、言語が変わる言語間翻訳においては、いかにSTに忠

実に訳したTTであっても、異なる「コンテクストとの相互交渉から」新たな意味付けが生じることになろう。翻訳の「翻」は、「ひるがえす」という「裏返しにする、急に変える」という意味がある。日本語の「翻訳」という語には、起点となるテクストを裏返したり変えたりすることが内包されている。全てがそのままなら、わざわざ「翻訳」と言う必要がない。

同じ時空間で文脈を共有する同時通訳やバイリンガル版出版などの一部例外を除き、翻訳において、ST作成時の「今・ここ」の文脈１と、TT作成時の「今・ここ」の文脈２は異なる。つまりTTを作成する翻訳行為は、STを異なる文脈におく再文脈化の行為と位置づけることができよう。膨大な量の情報が瞬時に地球規模で移動するグローバリゼーションの時代には、様々な情報が何層にも再文脈化されて飛び交う。そのような時代に、翻訳行為の役割と可能性についてどう考えればいいのだろうか。本稿では、まず翻訳の歴史的意義を先行研究から確認した上で、翻訳行為の役割をグローバリゼーションとの関連で考察していきたい。そして、言語と非言語を含むジャンルであるグローバル雑誌の翻訳事例から再文脈化の具体例を検証する。

２．翻訳の役割に関する先行研究

2.1　Schleiermacher（1813）：実用的コミュニケーションと言語形成

翻訳・通訳は、古くから異言語間の交流を仲介する役割を果たしてきたが、翻訳にはそれに留まらない歴史的意義があることも指摘される。シュライアーマハーは通訳的翻訳と本来の翻訳を区別し、通訳的翻訳を「目の前にある対象や外的な事実」を伝達して理解されることを重要視するものと考えたのに対し、本来の翻訳を、「言語を形成する」ものと考えた（Schleiermacher 1813/1963, 43）。グローバル時代という歴史上の一時代において、大量の情報を迅速に伝える必要性に対応するのは、まずは前者の通訳的翻訳、つまり個々のコミュニケーションを成立させる実用的ツールとしての翻訳であろう。それには、その都度の多様なジャンル（契約書、商品パッケージの表示、企業や機関のウェブサイト等）や使用目的に即した機能等価が求められるだろう。言語による伝達は、反復によって意味が定まり慣例化してこそ可能であ

り、この種の翻訳では、その規定された言語使用を前提としたコミュニケーション行為である。

しかし一方で、人はこうしたいわば「言語の暴力（Gewalt der Sprache）」の枠内で思考するしかない囚われた存在でありながら、同時に言語の側へ働きかけて、言語を形成することもできる。確かに、馴染みの無い概念や制度を取り入れようとすると、それについて語るための語彙を新たに造ったり、思考の枠組みに揺さぶりをかけたりするなどして、言語表現の可能性を拡大する必要がある。シュライアーマハーは、外国の植物を移植することで大地が肥沃になり風土が穏やかになる譬えを引きながら、言語も異質なものを取り入れることによって豊かになると考えた。もちろん19世紀初頭のドイツという歴史的状況を考えると、ナポレオンによるベルリン占領とナショナリズムの昂揚を無視できない。シュライアーマハーは、異質なものに敬意を払うドイツ国民は、「内的必然性」と「天命」から翻訳に駆り立てられてきたとし、あらゆる時代の価値あるものをドイツ語で純粋で完全に享受できるように歴史的総体へと統合することを、ドイツにとっての「翻訳の真の歴史的目的」（ibid., 69）と考えた。価値あるものを集積してその言語で読めるようになることは、とりもなおさずその言語の威信を高めることにつながり、しかもそれを純粋で完全に保存しようとする統合の営みはドイツ語そのものの可能性を拡大することになる。それは翻訳によって成し遂げられるのである。それも同化するのではなく、異化的な翻訳により可能だと考えた。

2.2　水村（2008）：翻訳の歴史的役割としての国語の誕生

翻訳が、言語を形成し、言語の価値を高めることに寄与する役割を果たすだけに留まらず、さらに歴史を遡って、翻訳が国語の成立に大きく関わったとの指摘もある。

まず国民意識の出現には、印刷術と資本主義が大きく関与したとされる（アンダーソン1983/1997）。16世紀当時、ラテン語を読めたのはごく一部のエリートであったため、書籍出版の市場を追及する資本主義は、俗語を話す大衆を潜在的市場と見て、ラテン語の下位、口語俗語の上位に位置する「機械的

に複製された出版語を創造」（ibid., 83）した。口語俗語は多様であったが、人々は出版語を通して相互了解できるようになり、その過程で特定の言語の場に所属する意識が生まれたとする。

しかし、口語俗語が出版語になるのは容易なことではない。水村（2008, 133-134）は、そこに翻訳という行為が果たした役割があると見る。翻訳とは「上位のレベルにある〈普遍語〉に蓄積された叡智、さらには上位のレベルにある〈普遍語〉によってのみ可能になった思考のしかたを、下位のレベルにある〈現地語〉の〈書き言葉〉へと移す行為だった」とし、漢語やラテン語のような普遍語に蓄積された叡智や思考法を〈現地語〉へと移していく翻訳という行為によって、現地語が徐々に「口語俗語」から「書き言葉」へと変身を遂げ、ついには普遍語と同レベルで機能できる「〈国語〉として誕生」したことを、「翻訳という行為がもっていた根源的な歴史的役割」と述べている。つまり、「〈国語〉というのは、〈普遍語〉からの翻訳という行為によって生まれるものだ」（ibid., 186）と見ている。

同様にForster （1970, 29-30）によると、ルネサンス期のヨーロッパでは、詩人がラテン語で書いた詩を自ら母語に翻訳していたという。「興味深いことに、16世紀において、難しい詩形のラテン語詩を書ける有能な卓越した詩人でも、現地語では苦労することが多かった。詩の型と言葉が欠如していたからである。実際、多くのルネサンス期の詩人たちは、母語よりラテン語で書くほうが簡単であった。[…] 詩人たちは自分のラテン語の詩を自ら翻訳して、現地語で詩の言葉を形成しようとした」という。これはシュライアーマハーのいう言語を翻訳により形成しようとする創造的行為に重なるものであるが、その繰り返しと蓄積のプロセスから、徐々に国語の誕生につながったと見ることができよう。

2.3　Cronin（2009）：求心的・遠心的グローバリゼーションと翻訳

翻訳はこうした歴史的役割を演じてきたと指摘されるが、グローバル化時代においてはどうであろうか。Cronin （2009, 127-128）は、グローバリゼーションの緊張関係として、求心的（centripetal）・遠心的（centrifugal）とい

う2つのタイプをあげている。求心的なグローバリゼーションは均質化に向かうものであり、「暗に帝国主義、征服、ヘゲモニー、西洋化、アメリカ化を指す」が、他方の遠心的なタイプは、「相互依存、相互浸透、異種混交、シンクレティズム、クレオール化」などをもたらすグローバリゼーションであるとして、そこに介在する翻訳は、いずれのタイプの媒介者にもなり得るとしている。

とはいえ、権力の不均衡を生む前者に警鐘をならす翻訳研究者が多い。例えば坪井（2012, 46-47）は、グローバル化の両義性としてグローバルな側面とナショナルな側面をあげた上で、「英語で発信される情報は翻訳を介して世界に流布するが、それ以外の言語、中でも少数言語や地域言語で発信される情報はほとんど翻訳されない」として、欧米優位の情報流通というグローバル化に翻訳が関わっていること、またナショナルな境界を作る過程でも方言を排除するなどして翻訳が政治と結びついていることに言及している。

確かに、ユネスコの統計[3]によると、1979年から2009年までに、最も多く翻訳出版された起点言語の第1位は英語（1,266,073件）であり、２位にフランス語（226,114件）、３位にドイツ語（208,236件）と続く。ちなみに日本語は８位（29,246件）である。なお、最も多く翻訳される目標言語の第１位はドイツ語で301,935件であり、２位フランス語（240,045件）、３位スペイン語（228,559件）、さらに４位英語（164,509件）、５位は日本語（130,649件）である。起点言語としての英語が目標言語としての英語より７倍以上多い輸出超過であり、日本語では逆に4.5倍の輸入超過となっている。

文化・文明の伝播は、高きから低きに流れる水のように伝わるものであり、翻訳の方向性は、価値の高い知識や技術が蓄積された普遍語から現地語の方向へと伝わると言われてきた。しかるに現代おいては、英語を筆頭に、フランス語、ドイツ語といった国際的影響力の強い先進国の言語に情報が集積されて、それが翻訳されて流布されていることが分かる。国際ニュースの配信においても、欧米系の通信社（APやReuterなど）が収集した記事に頼ることが多くなると、非西洋世界のニュースは数が少なく、しかも欧米のイデオロギー的観点からステレオタイプ的に捉えられたものになるという問題があるという（van

Dijk 1988b, 33-34）。つまり情報が欧米の文脈で捉え直されるということだ。例えばアメリカの中東報道研究機関（MEMRI）は、アラブ社会について、過激派、反ユダヤ主義、西側民主主義の脅威という表象を作り上げられるようなアラビア語STを入念に選んだうえで、それを正確に翻訳させて流布しているという指摘もある（Baker 2010, 120）。このような情報の量と質における権力関係の反映と不均衡の増大、そしてそこに翻訳が巻き込まれることについての抵抗は近年の翻訳研究の重要なテーマである。オースティンは発話行為理論で、言葉を発することが行為となることを指摘したが、それと同様に、翻訳することはただ言葉を訳すだけではなく、場合によっては紛争や搾取の当事者の行為になってしまうことがある。また翻訳者が、自身の信条や価値観に反するテクストを訳すことに葛藤を感じるケースもある。

他方でユネスコの統計では、発信する側の起点言語だけでなく目標言語も先進国や欧米系の言語が圧倒的に多いことに気づく。目標言語の上位50位までに、ヨーロッパでは小国（アルバニア語やエストニア語）や地域言語（バスク語やガリシア語）まで入っている。フランコ体制終焉後のスペインでは、「カタロニアやガリシア、バスク地方出身の作家が彼らの母語で教育を受けるにつれ、標準スペイン語のみに依存しなくなったために自己翻訳が復活した」（Grutman 2009, 258）と言われるが、情報理解のための直接的な翻訳・通訳だけでなく、言語的アイデンティティを守ろうとする言語保護政策に、翻訳が役割を果たすことが見て取れる。言語の多様性を重視するEUの政策方針の影響があるだろう。こうした欧米の言語に比べ、目標言語の上位50位までにアジアでは、日本語、中国語、韓国語、インドネシア語、ウズベク語、カザフ語の6言語しか入っていない。つまり、それ以外の言語では母語話者向けに翻訳されることが少なく、情報にアクセスするには母語以外の言語を読むしかない。「当時もいまも、人類の圧倒的多数は一言語だけを話す人々である」（アンダーソン 1997, 77）という状況から、情報格差が生じることになる。一方で、ローカリゼーション産業が成長する上で「重要な推進力となったのは、自言語のウェブ・コンテンツを好む、非英語話者のユーザーが増えてきたこと」（Cronin 2009, 127）にあるとも言われる。インターネット利用者の言語別統

計を見ると、英語がトップの26.3%（2016年）であるが、急速な伸びを示している中国語が20.8%で２位に浮上しているという報告[4]もある。ドイツのブラント元首相が「こちらが売る側なら顧客側の言語を話します。こちらが買う側なら、そちらがドイツ語を話さなければなりません」と述べたという言葉に象徴されるように（Schäler 2009, 158）、資本主義の戦略として、徐々に購買力をつけつつあるアジアの圧倒的多数をターゲットにし始めると、これまで翻訳されてこなかった言語にも、「翻訳するという選択肢」が選ばれてくるのではないだろうか。

翻訳は、単に情報内容を伝達するだけではなく、異なる思考の枠組みが混ざり合う場である。翻訳されることで欧米的価値観が浸透することにつながる側面はあるが、その言語で知的活動が触発されれば新たな創造が生まれる余地がある。アイルランドが現在、ローカリゼーション産業で世界をリードするまでになっているように、グローバル化と情報化の中で、これまで中心になれなかった地域にチャンスが訪れていることを指摘する研究者もいる（Cronin 2003, 2009）。

３．再文脈化としての翻訳と事例分析

3.1　再文脈化としての翻訳

Schäffner and Bassnett （2010, 8）は、政治ニュースのメディア報道は再文脈化（recontextualisation）の形式であり、「再文脈化は常に変容を含むものである、それは目的、価値、関心によって決まる。同様のことは翻訳を含む再文脈化にも当てはまる」と述べている。しかし、この再文脈化は政治報道の翻訳だけに限らず、翻訳全般に当てはまるだろう。したがって、事件などのニュースソースから、記事作成までのプロセスで使われる主要な方略として、例えばvan Dijk （1988a, 115-118）は、選択・再生・要約・局所的変更（削除・追加・順序の変更・置き換え）・文体的修辞的（再）構成」の5種類を挙げているが、これらは翻訳においてもSTからTTを作成するプロセスで同じように用いられると思われる。

そこで本節では、グローバル雑誌である*National Geographic*を具体例とし

て、翻訳においても上記5種類の方略が用いられることを示して、翻訳における再文脈化を確認したい。この雑誌は、41言語に翻訳されており、世界で850万人に読まれているという。[5]使用するのは、2016年9月号の英語版（ST）、日本語版（JTT）、ドイツ語版（DTT）とする。この雑誌は非西洋について、オリエンタリズムと原始状態の表象に合わせて作り出そうとしているとの指摘もある（Steet 2000, 5）。その点にも注視しながら具体例を見ていく。

3.2　選択（selection）

2016年９月号を英日独の３つの版で比較してみると、記事内容が必ずしも共通するわけではない。目次の提示法を始めとする全体構成がまず異なっている。日本語版もドイツ語版もそれぞれに編集担当者がいて、読者の関心を惹くように記事内容の選定からページの配置、写真の選定と順序やレイアウトなどでアレンジが見られる。表紙の黄色の枠と雑誌名が共通していることで、３バージョンのテクスト間の関係性を確保しているが、ページを開くと違いが見えてくる。

記事内容としては、英語版には５件の長文記事と14の短い記事があるが、3バージョンで共通するのは、長文記事４件と短い記事が３件のみである。しかもその配列が大いに異なっている。例えば“basic instincts”という１ページものの記事は、英語版では長文記事の始まる直前（p.29）に配置されているが、日本語版では冒頭（p.9）に、ドイツ語版では最後（p.163）に配置されている。

写真の選定では、表紙の写真が異なる。失明治療という看板記事[6]の写真を使用する点では３版とも共通しているが、英・日では目を大きくクローズアップした写真が科学的印象を与えており、その虹彩は青みを帯びている。一方ドイツ語版では、インドの農村の少女が荒れた葦の茂みにいる写真を使用しており、失明と未開地の表象が関係付けられている。これは、英語版記事の最終ページに掲載されている写真であるが、ドイツ語版では表紙に採用したことでその印象が強められていると言えよう。ちなみに当該記事の本文には10枚の写真が使用されているが、その掲載順序もドイツ語版は半数を変更しており、

翻訳編集の介入度の高さが伺える。

また、毛皮ブームの記事[7]では、STで９枚の写真が使用されている。内訳は、ファッション関連が２枚、屠殺関連が４枚、飼育場（ミンク、ワニ、ダチョウ）が３枚である。ドイツ語版では、この内ダチョウの写真が削除されている。ケージのミンクは怯え、大量のワニは不気味であるため、力強い印象を与えるダチョウの動物園のような写真がなくなったことで、高級なファッションと舞台裏の残忍性のコントラストがより鮮明になっている。

以下では主にこの二つの長文記事を中心に例を挙げていく。

3.3　再生（reproduction）

翻訳では、言語テクストが入れ替わるため、STの要素がそのまま再録されるのは、非言語要素の部分である。この雑誌の場合、STで使用されている写真と図像、およびレイアウトなどがそのまま使用されることが多く、それがこの雑誌の最大の特徴と言える。3.2で指摘したような違いはあるものの、採用が決まった記事では、ほぼ同じ写真が使用されている。非言語情報は、一瞬で強いインパクトを与えることができるため、未知の世界の神秘に迫る写真は魅力的であり、また自然や環境問題などを訴えるには、言語で説明するより写真のほうが大きな影響力をもつだろう。

しかし記事の写真では、被写体で気になる点がある。失明治療の記事では、英・米の患者がメガネやサングラスをかけているのに対して、ナミビアとインドの視覚障害者は失明した目をむき出しにしている。さらにインドでの視力検査の写真では、検査用メガネを装着した老人二人を視力検査表の下に配置しており、極めて不自然で異様な雰囲気を作り出している。さらに、本文の内容としては、冒頭から米・英における遺伝子治療や再生医療などの最先端の失明治療について述べており（約75%）、ナミビア（アフリカ）での貧困と眼科治療の話題が最後の25%程度を占めるだけであるのに、使用されている写真は、英・米関係が３枚のみであり、ナミビアが３枚、本文に全く言及のないインド関連の写真が４枚である。記事内容と対応しない写真が多用されることで、最先端医療の記事内容そのものより、アフリカとアジアについての未開地とし

ての表象を強烈に印象付けるものとなるだろう。STに元々含まれている写真によるこうした印象が、他言語版のTTでもそのまま引き継がれて拡散している。

毛皮の記事においても、STの被写体に特定の傾向が見られる。つまり、記事本文からは、取材した飼育現場がアメリカ、カナダ、デンマークであることが分かるが、屠殺に関係する4枚の写真に写っているのは、ポーランド、コロンビア、タイの現場であり、特に人が作業するシーンにはコロンビアとタイの写真が使用されている。高級ブランドを写した2枚の写真がイタリアであり、舞台裏の残忍性を非西洋世界の表象と関連付けている。これがTTに再録されることにより、高級で豊かな西洋と残忍で野蛮な非西洋という対照的構図がそのまま引き継がれている。

3.4　要約（summarisation）

この雑誌翻訳では、STを要約する箇所は見当たらなかったが、小規模の要約的翻訳はある。例えば先ほどの失明治療の記事では、次のような箇所がある。

（例１）

ST：Yet the gains are modest, and Lewis still does almost <u>everything – dresses, bathes, moves around the house, gets the kids out the door, feeds Chopsy the dog, gets the mail</u> – by feel and the fading sight of her good eye.（p.46）

JTT：だが視力の改善はわずかで、ルイスは今も手の感触と、衰えつつある左目を頼りにほとんどの<u>日常生活</u>をこなしている。（p.48）

下線部が対応しているが、STの生き生きとした具体的描写が、日本語では単に「日常生活」でまとめられている。

また雑誌の目次ページには、それぞれの記事内容を簡潔に要約した紹介文がある。これは、読者に対して記事への関心を喚起する機能があるだろう。ここでは、その要約のされ方の違いを挙げておく。例えば毛皮ブームの記事は、次

のように紹介されている。

（例２）
ST：Fur is popular again, but humane treatment of the animals remains a challenge.
JTT：ファッション界に毛皮が再び返り咲き、ヒップホップ界や十代の若者にまで愛好者の層を広げている。一方、生産の現場では、毛皮用の飼育動物の扱いが見直されつつある。
DTT：Pelze liegen wieder im Trend. Obwohl die Tiere noch immer unter elenden Bedingungen leben und sterben. [直訳：毛皮が再び流行している。動物はいまだに悲惨な条件で生き、死んでいるのに。]

毛皮ブームの再来と動物の扱い、という二つの観点が述べられている点では３版は共通しているが、後者についての提示の仕方が異なる。STではまだ課題がある（remains a challenge）と見ており、ドイツ語版ではさらに直接的表現で問題視する姿勢が示されている。一方、日本語版では、「見直されつつある」として改善の方向に向かっていることを伝えており、前半のブームの分量を拡大していることからも毛皮ファッション肯定を印象付ける。なお、この記事のウェブページ[8]での紹介文も、日本語版は「毛皮への逆風がファッション界に吹き荒れたのは過去の話だ」という文で始まる。STという同じ記事素材を、どう評価して提示するかにこのような違いが見られる。

3.5　局所的変更（local transformation）

テクスト内の局所的変更には、「削除（deletion）・追加（addition）・順序の変更（permutation）・置き換え（substitution）」がある。これは通常の翻訳にもよく見られる現象である。例として、失明治療の記事の視力検査の写真に付けられた説明文を挙げる。

（例３）

ST：Residents of India's Sundarbans region don test-lens frames for eye exams. The eye-care team, led by ①Asim Sil, travels this remote, river-laced region by boat. ④The team's goal: to help reduce ③India's blind population of more than eight million.（p.32）

JTT：インドの②奥地スンダルバンスで、視力検査を受ける住民たち。③インドには、全盲の人が800万人以上いる。②医師のアシム・シル率いる眼科医療チームは、川の多いこの地域をボートで移動し、④視力障害の予防や治療に奮闘している。（p.34）

DTT: ②Weltweit gibt es 39 Millionen Menschen, die nichts sehen können. ③Allein acht Millionen Blinde leben in Indien, viele in schwer zugänglichen Regionen wie den ②Mangrovensünpfen von Sundarbans. Augenärzte bereisen die Gegend mit Booten und machen Sehtests mit den Bewohnern.（p.38）[直訳：②全盲の人は世界中に3900万人いる。③うち800万人がインドに住んでいて、多くは②マングローブの湿地スンダルバンスのように、行くのが困難な地域に住んでいる。眼科医たちはボートでこの地域を周り、住民たちに視力検査をする。]

STの下線部①Asim Silの人名はドイツ語版では「削除」されている。日本語およびドイツ語版の下線部②が「追加」されている。下線部③は、STでは最後に提示されている情報であるが、日本語版もドイツ語版も前方に移動して「順序が変更」されている。STの下線部④は数の削減という目標であるが、日本語版では現実に行っている予防と治療に置き換わっており、ドイツ語版では削除されている。

この短い説明文に、４種類の局所的変更の全てが見られた。記事本文の翻訳は基本的に英語STに即した訳になってはいるが、このような局所的変更は随所に見られる。例えば、視力回復後に見たものを列挙する箇所では、STやドイツ語では「クリスマスツリーの灯り」が述べられ、ドイツ語版では小見出しにまで使用されているが、日本語では削除されている。

3.6　文体的修辞的（再）構成（stylistic and rhetorical formulation）

ここでは、毛皮ブームの記事を取り上げる。この記事のトップページでは、ケージに入れられた一匹のミンクの写真が見開きに大きく掲載されており、そこに3種類のテクストがある。まず大きなフォントのタイトルであるが、英・日では暗示的表現（‘Back in Fashion’、「毛皮ブーム再来の陰で」）であるのと対照的に、ドイツ語では直接的表現で残忍さを前面に出している（‘Mörderische Mode’ [残忍な流行]）。

タイトルの下には中サイズの説明文があり、例２と同様に、‘a push to make the life and death of captive animals more humane’（JTT「生産の現場では毛皮用の飼育動物の扱いが見直されつつある」）は、将来に向けての改善に焦点が当たっているが、ドイツ語版では‘Doch noch immer leben und sterben die Tiere unter elenden Bedingungen. Was können wir dagegen tun?’ [直訳：しかし動物たちはいまだに悲惨な条件で生き、死んでいく。我々に何ができるのか]‘と、問題のある現状に焦点を当てた表現と、読者を含めた「我々」への問いかけになっており、修辞的に再構成されている。

写真に対する小さなフォントの説明文には、日本語版では、ヨーロッパで「飼育環境の改善を目指して厳しい基準が新たに設置」とあり、ここでも深刻さや残忍さを連想させるような表現をなるべく抑えようとしている。STではその対応について動物福祉の擁護者からの批判的意見を紹介しており、一方でドイツ語版ではその基準が「毛皮の品質を向上させる」という点で飼育者と利害が一致していることを指摘し、動物のための改善ではないことを最初から暴露して、批判的読みを方向付けている。

本文の構成もかなり異なっている。3.5とも関連するが、局所的変更というよりは、かなり大きな変更であるため、ここで述べる。STでは、取材現場の描写から始まり、毛皮業界を取り巻く変化をひとしきり述べた後で、９段落目[9]になってようやく取材動機を打ち明ける。つまりジャーナリスト自身の個人的体験（曽祖父が猟師だったことと毛皮を相続したときの困惑）から自分が混乱しているからこそ取材することにしたと。読者に感情移入を求めて、より身近に感じてもらおうとする方略であろう。一方、ドイツ語版では、この個人的体験

の話題を本文冒頭部に移動し、さらにその前に「突然重大な問題に直面し、どちらの側に立つのか、どういう人間なのかと、突きつけられる瞬間がある」[10]という追加の一文を配置している。それによって、記事を読む読者一人ひとりに自分の問題として考えるよう促し、選択を迫るテクストへと再構成している。

ついで毛皮業界の変化についての段落の始まりは、STでは‘In truth, getting past the killing doesn't seem like much of an issue anymore.’（p.102）となっており、下線部の控えめな表現から、毛皮業界を問題視する立場がまだあることへの配慮が見られる。その配慮の部分を日本語版では削除して「毛皮への逆風がファッション界に吹き荒れたのは過去の話だ」（p.126）と断言的な訳に調整されている。それに対してドイツ語版では、毛皮ブームの再来で、「毛皮の流行をどう考えるかという問いは、以前より切迫している」[11]とニュアンスを逆方向へと大きく変えている。

また、記事の末尾の２段落でも肉食や革靴などの動物搾取に比べると毛皮業界の規模が小さいこと（‘a sideshow’）、肉を食べながら毛皮を批判することに対する「偽善（‘hypocrisy’）」といった表現はドイツ語版では削除されたうえで、「まさに毛皮取引はメディアでも集中的に議論される感情的なテーマ」[12]という箇所を追加している。

STでは、動物保護の観点からの批判を取り入れつつ、毛皮業界が改善を進めて飼育へとシフトし新たな毛皮ブームが再来したことと、それに対して批判するより食肉業界を含めた全体の飼育状況の改善を進めるべきだという内容である。その同じSTを起点材料として、記事内容を全体としては概ね伝えつつも、日本語版では、動物保護の観点を抑え、問題は「過去のこと」と評価するスタンスで記事全体を編集した再文脈化であると言えよう。いくら飼育状況を改善しても付きまとう舞台裏の残忍さは、非言語情報の写真が伝えている。言語テクストだけでも穏やかにしておくほうが、読者に受け入れられやすいとの判断であろうか。一方のドイツ語版では、削除、追加、順序の変更、置き換えなどの方略を駆使しながら、問題はむしろ深刻になっていると評価する立場からまとめた再文脈化であると言えよう。メディアでよく議論されるという社会的文脈があると、解決済みとはできない。むしろこのテーマを自分の問題とし

て共に考えていこうとする姿勢で語り直されている。

4．おわりに

グローバル雑誌を例にして、翻訳を再文脈化のプロセスと捉えて分析してきた。同じSTであっても、翻訳対象の記事選定、写真選定、ページ配置などの雑誌媒体の全体構成において編集者の介入があることをまず確認した。写真がそのまま使用されることにより、ときに非西洋世界を未開で野蛮とする表象が強烈な印象とともに拡散されることを指摘した。また大小様々な変更を加えることで、テクスト全体をどう評価付けるかのスタンスの違いが浮き彫りになった。異なる文化社会の読者の関心や価値観によって変容が生じ、再文脈化が起こることを具体的分析で明らかにした。

冒頭で挙げた古歌の例のように、そのままの文言であっても文脈が変われば意味づけが変わるように、たとえ翻訳されなくても異なる文化的コンテクストでは異なる読みがあり得る。しかしそれは潜在的であり、目に見える形にするには何らかの発信が必要である。翻訳されれば、異なる文脈でどのような読みが為されたかが記録されて残る。翻訳することで欧米的価値観の強化・浸透につながることも懸念されるが、欧米的価値観といっても一枚岩ではない。今回取り上げたドイツ語版では、STにはなかった視点で語り直されており、いわばSTの潜在的可能性が引き出された、とも言える。場合によっては「深みと力を増す」ような語り直しもあるだろう。

雑誌作成は、記事を担当するジャーナリスト、写真家、編集者をはじめ多くのスタッフが関わる協働作業であり、一人の力では為しえない成果物が出来上がる。その翻訳版を作成するには、さらに翻訳者、翻訳版編集者などの協働が重なることで、ST作成時には顕在化しなかった潜在的価値が引き出される可能性ができる。翻訳は、別文脈が交差するからこそ可能な新たな創造的活動へと開かれているのではないだろうか。

【引用文献】

尼ヶ崎彬（1995）「歌論と仏教思想―古来風体抄と天台哲学」伊藤・今成・山田（編）『仏教文学講座第4巻　和歌・連歌・俳諧』勉誠社　11-36.

アンダーソン, B.（1983/1997）『増補　想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳 NTT出版

Baker, M.（2010）‘Reframing conflict in translation’, M. Baker（ed.）*Critical Reading in Translation Studies, Routledge*, 113-129.

Cronin, M.（2003）*Translation and Globalization*, Routledge.

―（2009）‘Globalization’, M. Baker & G. Saldanha（eds.）*Routledge Encyclopedia of Translation Studies,* Routledge, 126-129.

Forster, L.（1970）*The Poet's Tongues: Multilingualism in Literature*, Cambridge University Press.

Grutman, R.（2009）‘Self-Translation’, M. Baker & G. Saldanha（eds.）*Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, 257-260.

Internet World Stats ‘Usage and Population Statistics’ [http://www.internetworldstats.com/stats7.htm（最終閲覧日2017年４月29日）]

水村美苗（2008）『日本語が亡びるとき』筑摩書房

Schäffner, C. and S. Bassnett（eds.）（2010）*Political Discourse, Media and Translation*, Cambridge Scholars Publishing.

Schäler, R.（2009）‘Localization’, M. Baker & G. Saldanha（eds.）*Encyclopedia of Translation Studies,* Routledge, 157-161.

Schleiermacher, F.（1813/1963）‘Ueber die verschiedenen Methoden des Übersetzens’, H.J.Störig,（ed.）*Das Problem des Übersetzens*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 38-70.

Steet, L.（2000）*Veils and Daggers: A Century of National Geographic's Representation of the Arab World*, Temple University Press.

坪井睦子（2012）「グローバル化とメディア翻訳」『翻訳研究への招待』7号, 41-59.

UNESCO ‘Index Translationum：Statistics’[http://www.unesco.org/xtrans/bsstatlist.aspx?lg=0（最終閲覧日2017年4月17日）]

van Dijk, T.A.（1988a）*News as Discourse*, Routledge.

―（1988b）*News Analysis: Case studies of international and national news in the press*, Lawrence Erlbaum Associates.

1　尼ヶ崎（1995, 31-36）によると、藤原俊成の『古来風体抄』は、この歌を老僧が引用するエピソード に紙面を費やしているという。こうした古歌の引用が和歌の制作法に革新をもたらし、本歌取へとつながる。

2　これに類するものとしては、ボルヘス著「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」が有名である。一字一句違わない同一作品のままであっても異なる時代状況に置かれると差異が生じる。

3　ユネスコ統計“Index Translationum：Statistics”によると、起点言語の上位10言語は、

英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、スウェーデン語、日本語、デンマーク語、ラテン語であり、目標言語の上位10言語は、ドイツ語、フランス語、スペイン語、英語、日本語、オランダ語、ロシア語、ポルトガル語、ポーランド語、スウェーデン語である。

4　http://www.internetworldstats.com/stats7.htm（最終閲覧日2017年4月30日）

5　日経ナショナル ジオグラフィック社「ナショナル ジオグラフィック日本版読者プロフィール調査」http://adweb.nikkeibp.co.jp/adweb/mad/doc/nng_md_prf.pdf　（最終閲覧日2017年4月29日）

6　英日独での該当ページは、それぞれpp.30-53, pp.32-55, pp.36-59。

7　英日独での該当ページは、それぞれpp.96-113, pp.120-137, pp.102-117で、ドイツ語版が2ページ少ない。

8　http://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/magazine/16/081900013/082300005/（最終閲覧日2017年5月8日）

9　この段落は‘I suppose I should acknowledge here that I come to this story from a tangled perspective.で始まり‘So tangled, Yes. I set out to see for myself.’で終わる’（p.106）。

10　DTT：Es gibt Momente, in denen man plötzlich mit den ganz großen Fragen konfrontiert wird: Auf welcher Seite stehst du? Was bist du für ein Mensch?（p.106）

11　DTT：Die Frage, was man von Pelzmode hält, ist drängender denn je. Denn im 21. Jahrhundert feiert der Pelz ein grandioses Comeback.（p.106）

12　DTT：Ich glaube: Gerade weil der Pelzhandel ein emotionales Thema ist, das in den Medien intensiv diskutiert wird, eignet es sich dafür, die Zustände in der Nutztierhaltung insgesamt zu verbessern.（p.117）

（本研究は科研費（25370716）の助成を受けたものです。）

グローバル雑誌の翻訳における再文脈化について
―言語テクストと写真の英日独比較―

藤濤　文子

要旨

人や情報が地球規模で移動するグローバル時代において、翻訳を介した間接的なコミュニケーションを選択するのは、単なる意思疎通のためだけではなく、世界の均質化に抵抗して自己のアイデンティティや人権を守るためであったり、また情報格差を避けるためであったりもする。さらに、翻訳とは、ある歴史的・社会的コンテクストで産出された起点テクストを、別のコンテクストで再産出する行為であり、テクストの再文脈化と言える。こうした観方を踏まえて、グローバル雑誌を例にして、翻訳を再文脈化と捉えて英日独の３バージョンを比較分析する。翻訳対象の記事選定、写真選定、ページ配置などの全体構成に編集者の介入があることを確認し、写真の影響力で、ときに非西洋世界を未開で野蛮とする表象が強烈な印象とともに拡散ないしは強化されることを指摘する。また大小様々な変更を加えることで生じるテクスト全体の評価付けのスタンスの違いを浮き彫りにする。雑誌作成は、ジャーナリスト、写真家、編集者をはじめ多くのスタッフが関わる協働作業であり、さらに翻訳版作成に、翻訳者、翻訳版編集者などが加わる協働により、テクストの潜在的価値が引き出される可能性があると見る。

Keywords:

キーワード：翻訳行為　グローバリゼーション　再文脈化　雑誌翻訳